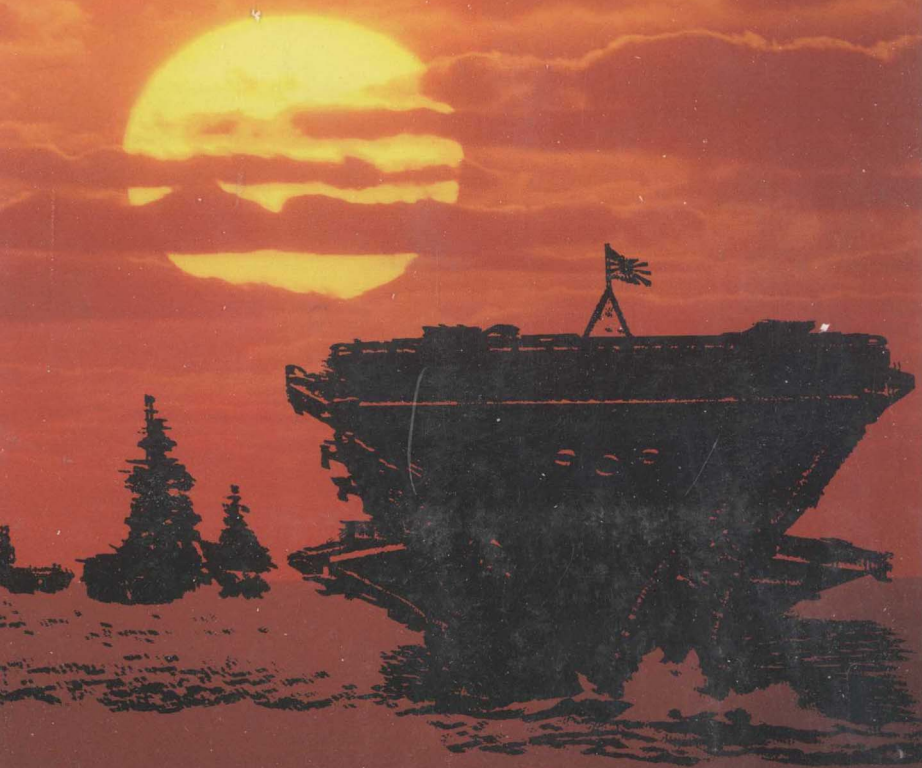


制覇する者

竹島将
下



著る

下

竹島将

集英社



制覇する者^{せいぱするもの}下

一九八八年一月二五日 第一刷発行

定価 一、二〇〇円

著者 竹島^{たけしま}将^{しょう}

装丁者 荒川じんぺい

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇
郵便番号 一〇一—五〇

出版部 (〇三) 二三〇—六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇—六三九三

製作課 (〇三) 二三〇—六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛
にお送りください。送料は小社負担でお取り替え
いたします。

本書の内容の一部または全部を無断で複写、複
製、転載することを禁じます。

制覇する者(下)

*この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とは一切関係ありません。

8

闇の中に雨が降っている。

どしゃぶりの雨だ。

雨粒が泥の中にも、うす汚れて塗料の剥げたトタンの上にも、壁の前に撒き散らされた紙クズや残飯の中にも跳ねている。

舗装道路にもかかわらず、補修されていないせいか、陥没したところに雨が溜まり、ヒビの隙間に雨が流れ込んでいく。

ここで昔と変わったところと言えば、せいぜいその道路の舗装程度だろうか？

確かに経済はかつての状態よりはその困窮の度合いを

緩和しているはずなのに。

道路の水たまりには、困窮のピークだった頃となんら変わりのない、けばけばしい原色のネオンが映っており、それが雨のせいで揺れている。

『SEXY ANIMAL』という文字の赤いネオンがふいに激しく水たまりの中で揺れた。

男が倒れている。

落書きにまみれ、残飯を叩きつけられたような壁の下で。

背広姿の男だ。

上着の裏には漢字で『白川』と刺繍されている。

日本人だ。

銃弾ではない。頭部や顔面には痣ができ血だらけになっている。

撲殺だ。

頭部はまるで月面のようにあちこちが陥没し、頭皮が裂け、割れた頭蓋骨が見えている。

眼球が両眼とも破裂し、右眼の残骸はえぐり出され、

倒れている男の顔の傍らに転がっている。

鼻はつぶれ、引きちぎれた唇。

フィリピン動乱から七年後——。

雨季が始まったばかりの五月二十二日。

マニラ。

マビニ通りの路地裏で一人の日本人商社マンが殺された。

それは七年前の動乱の始まりにも似ていたが、この殺人に始まる凄まじい『震え』は、七年前の動乱など比較にもならないものだった。

まさに巨大国家と巨大国家が激しく『震え』、そして破滅への道をひた走ることだった。

それが終わったとき、人々は思うだろう。

あの七年前のフィリピン動乱は、このときのための大いなる序章でしかなかったことを——。

ようやく七年の歳月を経て、制覇する者が誰であるかを決めるときが訪れた——。

七年前のフィリピン動乱は数多くのことを日本に刻みつけた。

日本国内には反米感情が深々と根づいた。

それに拍車をかけたのは何よりも日本国民自身だった。野党が米軍への思いやり予算カットを要求した。反米

軍デモが横須賀、横田、座間、佐世保、三沢、岩国、嘉手納などで発生した。

マス・メディアは日本政府の経済、軍事などの各方面におけるアメリカ一辺倒主義に疑問を投げかけ、反対論をぶち上げた。

評論家の中にはアメリカから入ってきたロックや映画、TV、ファッションなどの文化にまでケチをつけ、これからは日本独自のものを生み出すべきだと説く者さえ出てきた。

右寄りの者は国粋主義を口にし、左寄りの者は反米を唱えたために、右と左の両派が表向きには一つの方向、反米を打ち出すという戦後初めての現実を作り出し、それははからずもさらに国民を煽る結果になった。

世論の湧き上がりとマス・メディアの突き上げ、与党内の右寄りの国粋主義的タカ派もその突き上げに加わり、ついに政府は米軍の思いやり予算を大幅にカットせざるをえない状況に追い込まれた。

在日米軍司令官は一ドル百円前後の現状では、思いやり予算がなければ在日米軍の維持は不可能だという声明を発表し、米国内では反日世論が沸騰した。

米議会はさらに激しい貿易立法を決議し、多数の日本製品ダンピング調査や知的所有権（特許権）侵害調査が行なわれ、明らかに不当に偏向した調査結果が続出した。

その反発もあり、与党自由党と財界にも自主防衛論が高まりを見せ始めた。

その中で仲田は政權への返り咲きには失敗したものの、岡崎を通じて、防衛庁内部での安保解消後の自衛隊兵力、所要についての検討や緊急派遣部隊の研究を始めさせた。当然、その動きは当時首相だった安西にも伝わっていたが、安西には、動乱の余波を買って、財界からのバック・アップや財力の増加を始めた仲田の動きを抑え込めるほどの力はなかった。安西にしてみれば元来極めて右寄りの仲田にその方面のことをやらせておくことで、自分との協調を図ろうという腹づもりだったのだ。

米議会はそんな中で対日貿易制限法を可決する。

同時に米国内ではエイズ渦の拡大がさらに大問題となっていた。この時点で死者はすでに百万人に達しており、日本国内では反米感情と合わせ、アメリカ人への差別が始まった。

加えて三沢、横須賀、佐世保で次々に感染者が発見され、パニックとなった。しかも、エイズだった米軍人と性交渉を持った若い女性にエイズが感染したことが公表されると、日本人の意識の底流に根強く流れていた外国人への差別意識、特に黒人に対してのものがむき出しになった。

暴力沙汰があちこちで多発し、米兵の取締りを名目に、

在日米軍のMPが基地の街に溢れはじめたが、そのMPでさえ襲われる事件も起きた。

基地の町をはじめ、東京や大阪の大都市圏でアメリカ人立ち入り禁止の店が続出した。

厚生大臣が定例記者会見の際にオフレコであると前置きして口にした話がリークした。

『米軍基地はエイズの巣である。米軍人の外出を一切禁止できないかと思っている。日本人を殺しても謝罪一つしない奴らなのだから。米軍のエイズはソ連の侵攻よりもはるかに実質的な脅威だよ』

それは彼がタカ派であるゆえの話だったが、アメリカの新聞やTVなどの各マス・メディアは一斉に反発した。差別発言として、当然のことのようにアメリカ世論も激昂する。反日運動に始まり、謝罪要求や厚生大臣解任要求、さらには過激な国交断絶要求のデモが駐米日本大使館にかけられた。

それに反発するように厚生省からは日本のエイズ死者が千百七十三人に達したことを発表。その半数を在日外国人が占めており、そのうちの七〇パーセントがアメリカ人であり、日本人の場合もアメリカからの帰国者が二百十四人もいることがわかった。それは明らかにアメリカがエイズの巣であることを示し、そのために日本が被害を受けていることを示すデータだった。

それがまたアメリカの世論に油を注いだ。アメリカのエイズ専門家が改ざんされたデータだと口々に非難したためだった。

アメリカ政府は日本政府の思いやり予算カットに対抗して、自衛隊留学生への米軍学校受け入れ拒否を通告。同時にアメリカ国内では日本車ディーラーへの投石や、TVやステレオなどの日本製品の店頭での破壊事件などが相次いで起こり始めた。

アメリカ自体の経済は依然として低迷しており、何の改善もなされていないところに、かつてはいわばアメリカの部下的国家だった日本が公然と反抗してきたのだ。アメリカは意地になってそれを押しつぶそうとし、一方日本国内には、フィリピン動乱でのアメリカの対応をきっかけにアメリカ悪者論が大手を振って歩き、日米摩擦に関するあらゆることに拍車がかかり始めた。

マス・メディアは日米とも、よりセンセーショナルな方向を求め始め、それは必然的に「日米摩擦」を激化させ、必要以上に焦燥感を煽りたてることにつながった。フィリピン動乱の翌年、日本の銀行、保険会社などがついに米国国債の引き受け中止の検討を始めたという報道がスクープされた。

この時点で日本は米国国債を六二パーセントも引き受けており、引き受け中止の報道が外電により、アメリカ

をはじめとする全世界に伝わると、当然のこのように米国国債は暴落を開始した。

米議会はこれを、日本が米国の経済を握っていることを誇示し、自分たちの足元にひれ伏せさせようとするために仕掛けた情報工作、いわば恫喝と受け止めた。

アメリカ議会では日米安保条約破棄論が出るようになった。

日本政府首脳部はこれ以上の日米関係悪化に歯止めをかけようと躍起になっていたが、仲田は報道陣の前で『もし、米が破棄すれば、自衛隊を強化し、自主防衛、自立することになるだろう。米軍基地関係の経費約五千億円はまず、これに充てるべきだ』と発言。同様の主旨を仲田派議員である防衛庁長官も予算委員会で答弁した。その発言は、必死に事態を鎮静化させようとしていた日本政府の動きに冷水を浴びせ、アメリカでは政府よりはむしろ議会が態度を一気に硬化させた。

それはアメリカの対日貿易制限を一層厳格にさせる結果につながり、財界は一段と反発した。通産大臣は記者会見で、対米輸出は今後二五パーセントの減少を余儀なくされるだろうと、その見通しを語った。

全輸出中で対米輸出は約二五パーセントを占めており、その二五パーセントが減少すると、結果として全体では約六パーセントの減少となった。その減少分は対カナダ

や南米への輸出で補うよう努力することになったが、財界はアメリカのやり方にかたくなな態度をさらに強めていった。

その頃、岡崎を中心とした軍備研究グループから、軍事的に自立した場合の軍備計画試案が仲田へ提出された。

概要としては――

空母四隻、ミサイル巡洋艦八隻、原潜二十四隻、駆逐艦八十二隻、高速揚陸艦十二隻、戦闘機六百機、一個師団増設。偵察衛星を持ち、核抑止力についてミサイル原潜の研究を進める。核弾頭は、いわゆる核マイナス一年つまり必要となれば即座に作れる準備をしておく。核実験に関しては、反核団体の反発やアメリカ側に気づかれる可能性があるため極力行なわず、技術資料は中国から入手するというプランもあったが、これもアメリカに気づかれる可能性があるため、まずフランスから原潜のエンジンを買うことで接近し、その後に入手することとする。その他の武器の調達も、アメリカの兵器産業がまだ日本を巨大な兵器市場と考えていることと、武器を買うことで貿易不均衡を是正できるという大きな名目があるためにアメリカから買うこととする。

計画に費やされる期間は十年――。

ちょうどこの試案が提出されたとき、社民党が非同盟路線を打ち出し、自衛隊を認め、安保条約解消を主張し

始めた。

共民党は野党の中で唯一、軍事力拡大反対を主張していたが、フィリピン動乱で表面化した右寄りの風潮とソ連の西側へのすり寄り姿勢は共民党の勢力を格段に低下させることにつながった。そして、フィリピン動乱の影響は外務省にも波及し、フィリピン動乱での情報収集力の弱さと、相も変わらぬ対米追従の姿勢を批判され、発言力は急速に低下していた。

「ねえ、最近思うことがあるんだけど」

「うん？」

「新聞の写真がきれいになったでしょ」

「レーザー印刷ってやつだそうだ」

「へえ、レーザー光線で印刷するの？」

「頼むから、詳しいことを聞こうとするなよ。俺にもまるで判らないんだからな」

「あなた、よくそれでニュース・キャスターやっているわね」

「どういふことだよ」

「最先端科学の特集とかやっているでしょ。あれ、覚えてないの？」

「ないよ」

「本当に?」

「そりゃそうだろう。台本どおりに話が進めば、覚えてないさ」

「へえ」

「驚くなよ。いいかい、俺は月曜から金曜まで毎日、九十分やっているんだぜ。一週間で四百五十分。一カ月で……」

「判りました。はい」

武藤がその言葉に苦笑する。

テーブルを挟んで彼の前に座る暁子が、グレープ・フルーツをスプーンで食べながら穏やかに微笑んでいる。

テーブルの上には半熟のゆで卵、ハム、ベーコン、コーヒー、こんがりと焼けたトースト、皿にもられた葡萄やオレンジ、典型的な朝食が並んでいる。

ふいに室内に女性の声が響く。

『一時三十分です。一時三十分です』

暁子が笑みを深くする。

「あのうんざりする時計を休日ぐらい止めてくれよ」

武藤が新聞を持ちながら、部屋の奥を指差す。

壁一面の窓から差し込む陽ざしの中に二人のテーブルがある。

窓の向こうにはバルコニーと、さらにその先に倉庫街、

埠頭、そしてそれらの間を縫うように、横浜ベイ・ブリッジにつながる湾岸道路が見えている。

横浜。

山手町。

五月二十八日。

「あなたがうるさいって言えば、もう何も言わないわよ」

暁子が武藤の困惑した顔を面白そうに見ながら、言う。
「駄目なんだよ。君が自分の声を登録して、ロックしたろ。それで俺の声じゃ受けつけないんだよ」

「あつ、そっか」

暁子がグレープ・フルーツを一口入れて、わずかに声を張り上げて、言う。

「ウォッチちゃん。提示報告はいらないわ」

『登録されている声とは違います。ロック解除できません』

暁子が武藤を怪訝な顔で見つめる。

武藤が暁子の口を指差す。

暁子がその意味に気づいたように、グレープ・フルーツを飲み込んでから同じ言葉を繰り返す。

『判りました。ウォッチちゃんは提示報告はいたしません』

「おい。ウォッチちゃんってのは何だよ」

「私があの時計にそういう名前をつけたの。登録できるのよ。かわいいでしょ」

武藤は天井を見上げ、呆れたというように笑みをもらし、吐息をついた。

確かに目の前に座る暁子の髪には白髪が混じり、皺が目立つようになっていた。皮膚の張りも七年前の彼女のものではない。だが、武藤には暁子が年齢を重ねることに若くなっていくように思えたし、自分の胸の中に潜む彼女への愛しさや切なさには何の変わりもなく、むしろ深くなっていることを知っていた。

武藤の手にある新聞には、日本海海戦の記念日である二十七日に相模湾で行なわれた海上自衛隊の観艦式の写真が載っている。

正面に波をけたてて進む空母があり、その横を、艦尾に旭日の艦旗をひるがえしてミサイル巡洋艦が並んで走っている。

正面の空母の後ろにももう一隻の空母がやはりミサイル巡洋艦をしたがえて走っており、さらにその後ろにも自衛艦の長い隊列が続き、上空にはP3Cオライオンの大編隊が飛行している。

キャプションには『空母日進と春日に随走するミサイル巡洋艦吉野と浪速』と書かれている。

日米安保条約はすでに五年前にアメリカ側から解消の

申し入れがあり、在日米軍は三年前に撤退を完了していた。

その直接のきっかけはまさにアメリカの世論を席巻した反日感情だったが、アメリカの財政破綻に加え、現民主党政権とソ連との融和が近來になく良好な状態になったこともあった。米ソとも財政状態は極めて深刻であり、大規模な軍縮へ動かないかぎり満足な国家運営ができない事態に陥っていたためだった。その証が、米軍のヨーロッパ駐留兵力削減だとも言えた。アメリカはいまやパックス・アメリカナと言われた時代を輝ける過去としてしまっていた。

一方、ソ連は喉元の刃となっている日本の動きに極度に神経を尖らせていた。

アメリカからの日本の自立はソ連の警戒心を激しく刺激したが、逆に日本がアメリカ一辺倒にならないことは歓迎すべきことでもあった。

日ソ首脳同士の相互訪問も行なわれ、関係は、ソ連の隠された過敏な警戒心を別にすれば、ロシア革命始まって以来とも言える極めて良好なものになっていた。

日本の対米輸出は若干減少したが、日本経済全体にはほとんど影響しなかった。対米輸出が二五パーセントも減ると予想された状況が起きなかったためだ。米工業界に日本製の部品がないと操業不可能になるところが多数

続出したのも、その一因と言えた。海外投資の利益もさほど減少せずに入ってきており、経済はわずかな翳りを感じさせるものの、輸出はアジア、南米、カナダなどでは逆に伸びていた。しかしそれは世界市場でのアメリカの経済利益を依然として日本が圧迫していることを物語るものであり、アメリカ国内には、日本のソ連接近もあって、日本がアメリカのコントロールから完全に離れるかもしれないという困惑と対日焦燥感が蔓延していた。その反面、日本の国際的な地位は向上し、各地の国際紛争の調停依頼も舞い込むほどだった。

ここに至ってついに首相に返り咲いた仲田泰宏は次のように公言してはばからなかった。

『いま我が日本は、軍事、経済両面の力を保持した世界の真の大国となった！』

自衛隊の増強計画は五〇パーセントほど完成していた。防衛費は年間十六兆円。国民総生産はこの時点で年間五百三十兆円。防衛費対G N P比は約三パーセント、西欧諸国並みだった。その反面、公共事業費はかなり減らされており、売上税は五パーセントから一〇パーセントに引き上げられていたが、依然として円高のためか海外旅行だけは増加の一途をたどっていた。

ここまでの時点で完成していた主な軍備は空母二隻、ミサイル巡洋艦四隻、原潜七隻、戦闘機五百十七機。師

団の近代化は急速に進み、一個連隊の緊急派遣部隊が作られていた。加えて、高速揚陸艦六隻、駆逐艦七十二隻、「もうれつき」とした軍事大国ね」

暁子がトーストを食べながら、言う。

「ここまで揃えばな」

「やっぱりのファイリピン動乱のせい？」

武藤は新聞を折ってテーブルの上に置くと、暁子を見つめた。

「そうだ。あれからだ、こうなったのは」

暁子がそこで言葉を挟んだ。

「また同じことを言うの？ 七年前にマニラから帰ってきてから、あなたは一つのことを抜きにすればかなり高得点の亭主なのよ。その唯一のマイナス点は、七年間、聞き飽きて耳にタコどころか、言い方まで暗記しているわ。言ってあげましょうか」

「いいよ」

武藤が少しばかり憮然とした顔で立ち上がった。

暁子が肩をすくめる。

武藤はそのまま窓を開けて、バルコニーへ出た。

ほんのりと潮の香りをたたえた風がゆるやかに吹いている。

バルコニーはそこからの眺望を考えて作られたものらしく、四畳半ほどの広さがある。

武藤は手すりに背をもたせかけた。

空を見上げる。

春の終わりを告げる、わずかに霞んだ雲一つない青い空が広がっている。

小さく息を吐く。

「七年前……か」

武藤が帰国してからの騒ぎはまるでめくるめく夢のようだった。

NBSのキャスターなのに、他局の番組も含めて、あつちこつちに引きずり出され、フィリピン動乱の話をすることになった。六時から七時までのゴールデン・タイムに打って出たニュース番組『ニュース・シアター』のメイン・キャスターになった。六十分で一つの話題を徹底的に掘り下げる番組であり、しかも月曜から金曜までの週五日という今まででは考えられないものだった。

しかし、フィリピン動乱のときの活躍が記憶に新しい武藤の人気もあって、『ニュース・シアター』は他局の裏番組を押し退けて、その時間帯でナンバー・ワン視聴率を奪取した。その一年後には『ニュース・センター』のメイン・キャスターに抜擢された。同時に暁子と結婚した。だが、暁子にもスチュワーデスの仕事を辞める気がなく、まったく自然に二人は子供のない夫婦生活を選ぶ結果になった。

「ねえ……」

いつのまにか目の前に立っていた暁子が武藤の腰に両手を回し、自分から抱かれた。

不精髭の生えた顎に口づけする。

「うん？」

顔を戻し、暁子を見た。

「また、聞きたい？ 七年間、私があなたに言ってきたこと？」

「あなたの責任じゃないわ……って台詞だろ？」

暁子が声をたてずに笑った。

「判っているでしょ」

「判ってるさ。けどな、俺は日本が今の方向へ進み続けるかぎりずっと思い続けることになる」

「ずっと後悔し続ける？」

武藤がうなずいた。

汽笛が風に揺れながら聞こえる。

「でも」

武藤がつぶやくように言う。

「でも？」

「もし機会があれば、俺は全力を傾けてやると思うよ。」

七年前にできなかったことを、七年前にやってしまった間違いの修正を」

「でも、それで現在の総てを失うことになるかもしれない」

いわよ」

「総てって？」

「社会的立場、名譽、財産……」

言いながら暁子が唇をへの字に曲げて、うんざりするように首を横に振った。

「いいさ」

「本当に？　今の時代じゃ、本当に起こりうるのよ」

「判るよ」

「いいの？」

「いい」

武藤が自分の決意を覗かせるように、確固たる口調で言い、さらに繰り返した。

「いいんだ。俺は今ようやく、何が大切なのか、判り始めているんだよ」

そう言うとき、暁子を優しさに満ちた眼差しで見つめた。

「俺が食いつぶぐれたら、食わしてくれよな」

暁子がいかにも気持ちのよい笑みを浮かべた。

二人はそのまま口づけする。

吹きつける風の中の潮の香りが、なぜかひとときわ濃くなる。

そのときだ。

室内から電子音が響いた。

電話だ。

暁子が唇を離す。

「出ていい？」

武藤がわずかに残念そうに眉間に皺を寄せながら、うなずく。

「電話が終わったら、またゆっくりできるわよ」

暁子が茶目つ気たつぷりに顔をしかめ、部屋の中に入った。

武藤は再び空を見上げる。

唇に口づけの感触が残っている。

まだ、恋人同士だった時代の熱さがはつきりと残っている。

それが妙に初々しくて、一人、照れ笑いを浮かべた。

「あなた」

暁子が呼びながら、手にデジタル通信のワイヤレス電話を持って歩いてくる。

「八木さんからよ」

「八木？」

八木もあのフィリピン動乱の取材から、局内での評価を一変させていたし、現実には帰国後の彼の仕事振りはまさに人間が変わってしまったように積極的で、もっと正確に言えば攻撃的になっていた。

そして、武藤が『ニュース・センター』に帰ってきたとき、彼もそのチーフ・ディレクターとしてのポジション

ンを確保した。

「よお。何だい、食事でもおごってくれるって言うのか？」

「今、局なんです」

「局？」

そう問い返す武藤の横で、暁子が手すりに体をよりかけながら、チョコレート・ケーキを食べている。

いま流行りのシンプレスという低カロリー・ノーコレステロールの代用脂肪を使った食品だ。

「どうしたんだ。土曜日まで仕事しているのか？」

「僕はワーカホリックなんですよ」

八木は武藤の言葉に苦笑をまじえて答え、さらに続けた。

「実は月曜放送分のVP（ビデオ・パッケージ）編集が残っていたんで、こちらに来ていたら、レオから連絡が入って」

「レオ？ あれのレオ・ギルモアか？」

レオはフィリピン動乱のときに武藤たちの現地コーディネーターをやっていたフィリピン人の男だ。

ケーキを食べていた暁子のフォークの動きが止まった。

「久し振りにじゃないか。レオが一体何だったというんだ？」

武藤たちは動乱以後、フィリピン取材があれば、必ず

レオに依頼していたが、武藤自身は忙しいうえに、彼が足を運ぶに値いするほどフィリピン取材の仕事がなかったせいで、その後は会っていないかった。

「それがこう言うんですよ。おかしいって」

「おかしい？ 何がだ」

「レオの言葉を正確に言えば、こうです。先週、マニラで日本人商社マンが殺されたんですが、また今日、一人日本人の死体が発見された。それに合わせてブランドでデモが続発している。マニラがおかしい。こんな感じですよ」

「マニラが……」

武藤はそこで言葉を切った。

いやに胸騒ぎを感じさせる予感が全身を走った。

「マニラがおかしいって？」

暁子が不安そうな表情で武藤を見つめた。

つい直前に交わした会話が彼女の脳裏にまぎまぎと甦った。

——もし機会があれば、俺は全力を傾けてやると思うよ。七年前にできなかったことを、七年前にやってしまった間違いの修正を——。

——でも、それで現在の総てを失うことになるかもしれないわよ——。

——総てって？——。

——社会的立場、名譽、財産……——。

——いいさ。俺は今ようやく、何が大切なのか、判り始めているんだよ——。

二人を包み込んでいた芳しい潮の香りを含む風が、なぜかそのとき、突然やんだ。

二人の感じる不安が、これから現実になるぞと告げるかのように——。

——午後二時。

「デモだつて？」

『そうなんです。プラントでデモが続発しているんですよ。何の前触れもなく、突然なんですが』

東日新聞マニラ支局特派員松原の溢れんばかりの若さを感じさせる張りのある声が、わずかなタイム・ラグを置いて聞こえる。

「何のデモなんだ？ 反米なのか？ それとも反日なのか？」

『それが反日のプラカードもあるかと思えば、反米もあり。結局、反プラントっていうことです』

「何？」

有馬が当惑した声を上げる。

東京。

大手町。

東日新聞編集局外信部。

フィリピン・プラントは七年前の有馬のスクープにもかかわらず、グラントの強力なリーダー・シップのおかげで、様々な疑惑をはらみながらも二年前に完成した。

まさに日米合作の超巨大プラントだった。名前そのものも『プラント・シティ』という。マニラの中にもう一つ町があるということだ。

その名のとおり、その範囲はキアポ全域とマラテとパサイのほとんどのに及び、工場、住宅、リクリエーション施設など、日本人やアメリカ人が生活するのにまったく何の支障もない町が作られた。

さらには同様の形で規模を小さくしたいわば衛星プラントが、ケソン、ミンダナオ島、ルソン島等に作られ、フィリピン全体をプラント化してしまった。

工場では、これまでは日本で生産し、輸出していた商品を作っていた。その商品を日本の本社の指示を受けて、フィリピンから直接、第三国へ輸出する事業所も当然のことのようにできた。しかも、七年前に有馬がカーツに告げたとおり、このプラントにはフリー・トレード・センターが作られた。これはプラント・シティというまったく同じ地域で作られた日米の製品がこの場で相互に取